
過去の記憶は今のトラウマ

紫苑 鎌鼬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

過去の記憶は今のトラウマ

【Nコード】

N9876Y

【作者名】

紫苑 鎌鼬

【あらすじ】

とある国でとある学園に通う大貴族の娘リユネは婚約者である王子リクトに日々苦しめられ傷つけられていた。廊下で鉢合わせでもすればすぐに追いかけられ首を絞められ、口付けられる。従わない私が憎らしい。そう勘違いし怯える彼女と本当は彼女のことが愛してやまない独占欲大で俺様な彼とのすれ違いな恋愛物語

今の関係

「はあっ、はあっ、…はあっ」

早く…早く逃げなきゃ…！

ダダッ…！

鎖骨辺りまである長く緩やかな赤い髪がフワッと浮いて流れていく。

私はとても広い校舎の中を全力で走っていた。

右手で授業で使う資料の束と筆箱を抱え、

本来一本道でたどり着くはずの教室までの道のりを、

私は今、ある人から逃げるためだけに遠回りをしていた。

「待て…！」

彼の声がすぐそばまで迫ってきていた。

ポロ…ッ

「……あ!？」

思った以上に近くで声がしたため、

私は筆箱を落としてしまった。

カタンッとそれは音をたて壁際に落ちた。

ヤバ…！

私は急いで落としてしまった筆箱を左手で拾ったが…

ドンッ！！

「うっ…」

と壁に叩きつけられた。

その瞬間背中に大きな衝撃を感じて思わずうめく。

それは捕まったことを悟った瞬間でもあった。

背中に感じたとき反射的に上を見上げると…、

視界の隅で彼の腕が私の方へと延びていくのが見えて恐怖した。

だが身構える時間などなくて…

ガッ”！！

と首を絞められた。

力が抜けて両手からものが落ちる。

ヒラリと資料の束が舞い散らばって落ちた。

私の体を他から見えぬように彼の影で覆われていた。視界が暗い。

「くうウ…ッ」

「もう逃がさない」

思わず首を絞めてくる腕をつかむ。

そして彼をにらんだ。

く…苦しい…なんでいつもこんなこと…

そんな思いで見つめてた。

しかし彼は不適な笑みを浮かべながら私を見下ろしてた。

「逃げるな。俺に従え。」

いつもお前は従わない…苛立つんだよ、リュネ。」

私の心中を察したのか彼はそう呟いた。リュネというのは私の名前だ。

名前を呼ぶときはいつも不機嫌だ。

彼の青い瞳が苛立ちをさらに募らせて首を絞める力をぎゅうつと強くする。

「ッ…ウウ」

息が…できない、苦しい。

助けて…はなして…。

「…また、はめてないじゃないか、はめろっていっただろ、リュネ」

ふと彼は首から手を離し、その腕を背に回して反対の手で私の左手を手を取った。

彼は器用に口元まで手を引き寄せて口付けた。

「…ッ!？」

私は望んでいないが婚約を結んでいる。

彼は、いつもそうやって私が婚約指輪をしないことをとがめるように口付けてくるが、

慣れるわけもなく悪寒が走る。

息ができるようになった状況なのにできなかった。

彼の行動する理由が分からないのだ。そして…怖い。

「今、持っているか？」

「…も、もって…、ない」

「な、んで…ーンッ!？」

ただ、わからないままに聞いた言葉は顔を近づけてきた彼の中に飲み込まれた。

「んう…：んんッ」

口付けられ、逃れようとすればするほど彼は私を拘束する。

ひどく苦しくて怖くて何がなんだかわからない。

そういうとき彼は私に息を吹き込んでくる。何度もキスを繰り返す彼に、ただされるがままの私は呼吸がままならないからだろう。

本当に不思議で怖い存在なのだ、彼は。私を残酷なほど苦しませるときもあれば、こういう風に触れてくる。

「んう…や、やめ…：…」

彼が一息ついて再び口付けようとしてきたとき…

キーンコーンカーンコーン♪

休み時間が終わる5分前の鐘が鳴った。

「…チッ」

彼は悔しそうに舌打ちし、私から離れた。そして私の床に散らばった資料を束ねて筆箱も拾うと、解放された

ばかりの呆然としている私に差し出してきた。

「…ほら」

彼は私に受けとるように促す。

「……。」

ふと我にかえった私はだまって受け取った。
ちよっとは優しいんだなと思いつつながら

「…拾ってやったんだぞ、感謝はないのか？」
青色の瞳が怪しげに見つめてくる。

「あ、有難うございます……殿下」
一体誰のせいだと思って…！

そう心の中で私は毒付きながらもお礼をのべる。

「礼なんかより、俺の名前…呼べ。」

「え…？」

何で名前なんか……。

そう思って見上げてみると、

金髪をかきあげて

我慢しきれなかったのか不機嫌顔で、

「リュネは名前で呼べっていったらどろ…！ほら、拾ってやったんだからはやく呼べ」

そう、つかかかってきた。
なんて俺様なやつだろう。

優しいだなんて思ったのは間違いだったんだ。

「…リクト殿下」

私は渋々名前を呟いた。

そう彼の名前はリクト。

この国の第二王位継承権を持ち、

貴族のなかでもほぼ王家と対等な位を持つ大貴族の長女の私と婚約をしている人だ。

「そんな嫌そうに呼ばれたくはないんだが…まあいい許してやる。」

彼は私が呼んであげたにも関わらず

不満顔であった。納得がいてないらしい。

「リュネ、次は必ず指輪してこいよ。これは命令だからな！」

そう彼は私に言いつけ去っていった。

その後ろ姿を見ながら

「…あんな邪魔になるものつけるわけないじゃん」

と、小さく呟いた。

ごそごそとポケットのなかを探って1つの大きなルビーの指輪を取り出す。

キラッと輝きを放つ大きなそれは、

それなりの重さがあった。

そんなものつけたら、手作業には邪魔だし、王子を狙う女子たちの

標的になってしまう。私はそれが嫌だった。

「私を苦しめて傷つけて遊ぶのが楽しいんだ、彼は。」

そうとしか私には考えられなかったのであった。

血縁者と考え事

そのあと、私は急いで教室に戻った。
席についてすぐに次の準備をして待つ。

「ふうー…」

ま、間に合ったー

と心の中で心底安堵し、一息つく。

いつも彼と関わりと授業に支障が出るのだ。
というかはつきり言って余裕がない！

そういつもギリギリな私を見てか、

「また、ギリギリじゃん、さっきまでは余裕ありりだったのに、
なんかあったのか？？」

と、隣に座っている偶然にも私の血縁者である男レオが、怪しげに
聞いてくる。

おそらく…また、というのは今回も

もしくは今日も、のどちらかの意味を含ませているのだろう。
…どちらにせよ、怪しまれているのは確か。

なかなか鋭い…！厄介だ…！

と舌打ち気分で、正直に殿下との一件を明かしたくもなるが、
それは言うわけにいなかった。
そういう事情が私と殿下にはある。

「そうなんだよねー…実はあったんだよ、それが」

…この際、でっち上げちゃえ♪
そう思い至った。

この手のやつは否定すると疑い深くなる。
少し面倒そうにため息をついてレオをうかがった。

「何が？」

やはり興味を持ったようで食いついてきた。

レオは赤髪にしてルビーのように輝く瞳をもっている。その瞳は今、好奇心と探求心でいっぱいだった。

「それがね…」

少しもったいつけながら言葉を繋げ…

さも嫌そうに、

「先輩とさ、廊下先でぶつかっちゃって、お互い持ってた資料が床でごちゃ混ぜ。それをなんとか識別して分けるのに手間取ったんだ。ほんと参ったよ。」

と両手でお手上げポーズ。

…どう？私の現実にあるそうでない話は。と自分では傑作のつもり。

「ふーん。」

結局誰とぶつかったんだ？」

レオは私の話に生返事で、一番聞かれたくなかったことを聞いてくる。

「…さあ？知らない人だったよ。お互い急いでたから」
知りたくもない相手だったよ…。

と心で呟き、首をかしげた。

「ふーん。知らない人ねー。

：怪我は？お前ドジだからなくしたんじゃないのか？？」

彼は私をわざとらしくじろじろと見て言った。

「：！？しないよ！

ぶつかったただけでするわけないじゃん：！」

思わずその言葉に赤面した。

確かに私はドジだし、衝撃があつた背中では痛いけど、そんな弱々しくない！

「ふーん？そうか？怪しいな。

：それはそれとして油断すんなよ？」

「油断なんていつもしてないよ！」

怒ったように私は語尾を強めて言った。

あーもうっ！！憎らしい、何この態度！

レオのせいで気分を駄目にした。

落ち着かせるために深呼吸して

授業に集中する。

「あ、そう。せいぜい気を付けるんだな」

「わかってるよ、全くもう！いつもそうやって……………ッ」

私は授業に頭を切り替えたため、

彼の目が細まったことに気づかなかった。

しかし、授業といっても簡単なものだ。考え事していても出来てしまう。

そう、考え事といえば、

――――殿下のことだ。

何故、私なんかと婚約を結んだのだろうか？

私と彼が初めて出会ったのは公式の場ではない。どこぞの貴族が開いた仮面舞踏会である。当然素顔が見えなければ正体などわかるはずもない。

彼とあって彼の指示を背いたら：

あそはとんとん拍子でこうなってしまったのだから。

しかも私を痛めつけて：

――ホント何がしたいんだか。

考えれば考えるだけ無駄になっているようにしか思えないほど、殿下の行動は矛盾していたのだった

血縁者と考え事（後書き）

血縁者レオ！！

新キヤラ登場♪さて話がここから展開していきますよー！

待ち伏せ者とストーカー（前書き）

リクト殿下とレオ視点です♪

待ち伏せ者とストーカー

俺はリクト。

第二王位継承権をもち、

リュネとの婚約を取り付けた王子だ。

王子という立場のせいか、

近寄ってくる女は欲に目が眩んだ者ばかり。そういうやつらにはうんざりしていた。褒美を求めるくせにそれ相応のことをしない。それが癪に障って軽蔑したりするのは簡単だった。

人を見下せたり、支配できることに快感を覚えた。

そんな快感ばかりにとらわれていたときだ、俺に従わない女が現れたのは。

最初は従わせようとムキになっていた。俺の指示は聞かず兄の指示は素直に聞くそんなやつだったから余計にだ。婚約のきっかけも服従させたいの一心だったのも：認めよう。だが、兄にとられたくなかった：

云わば独占したかったの一言が今の冥利に尽きる。

せっかく婚約者として自分のものにしたのだが、婚約指輪すらはめてくれない。

しかも名前すら呼んではくれない。

あげくの果てに学園で会おうものならなにをおいても一目散で逃げてしまう。

俺に逆らえばどうなるかなんて身に染み付いているはずなのに。

そんな彼女が唯一俺を見つめてくれるのは俺が彼女を捕まえて苦しめているときだけ。

あの俺に対抗しようとする目が俺にとっての救いだっただ俺に気持ちをぶつけてくれるありのままの視線。

それが欲しくて楽しくていじめるのが楽しかった。

何があっても俺に頼ろうとしない彼女を俺に依存させたいと思う。まだ時間はある。

少しでも優しくすれば心を揺るがせる彼女がいるかぎり俺に勝機はあるのだから。

次の日、とある情報を得て資料室で彼女を待ち伏せていたら、その広い資料室でまんまと出会って昨日と同じように捕まえ、人気のない隅までつれこんだ。そして苦しめで救い出すように口付けた。拒絶する彼女の反応が愛しくて俺は幸福で満ち足りていた。

しかし、俺の余裕や幸せはすぐに消えてしまった。とある目撃者のせいだ。

俺はレオ。炎の属性を司る者だ。

そして、隣の席で考え事に没頭しているリュネの血縁者である。

俺は小さい頃からリュネと交流があった。なににおいても俺にとって近しい存在だった。

しかし、今、リュネは俺に隠し事をしている。

特に同じクラスになって話すようになって薄々気づいてしまった。

――彼女の行動パターンに狂いがあることを。

今までは問い詰めることが彼女の負担になると思って我慢していた。だが隣の席になってより存在感が増した中、我慢の限界が早くもや

って来た。

「――なにかあったのか？」

と、怪しげに聞いてしまうのは案外簡単だった。

「あつたんだよね、それが」

と意外にも答えてくれるのを聞いて俺は、我慢は無駄だったのかと思えた。

しかし思いのほか情報は得られた。

今日あったことを彼女が面倒くさそうに話してくれて、多少現実味もあったが違和感のあるものだった。

誰とぶつかったのかを問われれば、

知らない人だったとはぐらかすように言われ、

怪我はないかと問えば、

ないに決まってる、と断言される。

油断するなと警告すれば

してない！ときっぱり返された。

まるで、今振り返ると誰かに迫られてる前提の会話のような気がした。

出来事の話に違和感があったのも

俺が聞いたこととずれていたからだと今は断定できる。

俺は今までのことを聞いたのに

リュネは今日のことを話していた…しかも俺の聞きたいことは曖昧な表現で返してきて。

まるで…

話したいのに話せないから、

わざとヒントを混ぜて、

助けを求めているのではないのか
と錯覚してしまうほどに。

そして次の日あとをつけていたら、

錯覚だと思っていたことが本当のことだったかもと衝撃を受けたの
だった。

待ち伏せ者とストーカー（後書き）

はやくも激突か！？
次回衝突します！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9876y/>

過去の記憶は今のトラウマ

2011年12月3日13時48分発行